

海
の
火

倉本四郎

Shirō Kuramoto

海の火

倉本四郎

Shirō Kuramoto

講談社

海の火うみのひ

1989年10月5日 第1刷発行

著者 倉本四郎

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二／郵便番号 一〇二
電話東京(〇三)九四五―一―一(大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

定価 一五〇〇円(本体一四五六円)

倉本四郎くらもとしろう

昭和18年8月30日、神戸に生まれる。本名山口四郎。南日本新聞社勤務を経て、独立。昭和51年以降「週刊ポスト」誌上で独自の書評ページを担当し、大きな評判を得る。著書に、『出現する書物』(冬樹社刊)、『恋情は思い余って器官におよぶ』(筑摩書房刊)等があるが、本書は本格的な創作活動の出発点となる記念碑的な書下ろし作品。

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第一出版部あてに願います。

© Shiro Kuramoto 1989, Printed in Japan

海 の 火

装帧
菊地信義

ヨーコが手首を切つて海に入つた、という電話を繁男^{しげお}さんから受けたとき、ぼくはとりみだしはしなかつたと思う。バカなことを……と舌打ちするおもいはさらになかつた。

おさえがたい憤激^{いんげき}があり、それがいつ、どこで、どのようにして根づき、どこへむかつているのかを訝^{いぶか}りながら、衝撃からも狼狽^{うろた}からも遠い場所で、見知らぬ火口をながめる者のようにして受話器を耳にあてていた。

そんなことになるかもしれないという予感^{よかん}は、前日の昼下がり、極楽寺の駅頭で別れたときに兆^{きざ}していたのである。

電車からおりぎわに、ヨーコはやにわに唇を押しつけてきた。何が起こつたのかわからずにあらがうぼくの顔を、しっかりと両手でとらえ、激しくつつくようにしながら、さよならと二度口にした。身をひるがえしてヨーコが行つてしまうと、はじかれたように発車

のベルが鳴り響いた。まわりの乗客に対する羞恥という以上に、足場を失うような深い不安にゆすぶられて、ぼくはあとを追った。

改札口で追いついた。声をかけると、ヨーコは「あ」と小さく叫び、からだをこわばらせた。まるで会ってはならない黒いものに出くわしたみたいに早足になり、広場を横切る人波にまじった。梅雨明けの最初の土曜日で、駅頭はこみあっていた。ぼくの鞆は、すれちがう海水浴客の荷物とぶつかり、何度かうしろに取られそうになった。

海岸まわりのバスを待つ長い列に、ヨーコはくわわった。いつとき列のはなやぎには不似合いな顔を並べていた。そのときにはぼくは、そのバスが、入水自殺者がよくあがる骨崎を通ることに思い至っていた。

あのとき、予感にしたがって行動していれば、騒ぎは未然に防げたのかもしれない。しかし、ぼくはヨーコをひきとめようとはしなかった。予感以外に、ひきとめるべき理由がなかった。ぼくらはふたりきりの夜を過ごしてきたところだった。出会ってからのはじめて経験する夜だった。その余韻のなかを、さっきまでたゆたっていた。ぼくらの関係ははじめまったばかりだったのだ。

きつい日射しだった。二日酔いと寝不足のからだは、光に叩かれて暗所にひきこもりたがっていた。噴き出した汗で、シャツがべったりと肌に貼りついている。家に帰り、シャ

ワを浴び、すっきりしたかった。前に並んでいるショートパンツの女が、ぼくらをちらちらと盗み見ては、つれのやせた顔の青年に耳打ちしていた。ヨコと同じ年頃なのに、布切れで隠しただけの胸も、腰まわりも太腿も、はるかに成熟して、におうようだ。まだ梅雨の湿りをとどめたその生白い肌が放つ粘つきからも逃れたかった。

ぼくは、安逸を求める気もちのほうにしたがった。

——もう帰らなければならない。

とぼくはいった。

——きみも、今日は帰ったほうがいいよ。海には、今度一緒に行けばいい。

ヨコは答えなかった。かたくなにうつむいたまま、列から離れるそぶりもみせなかった。バスが来て、長い列が動きだすまえに、ぼくは背をむけた。極楽寺から家のある鯖浜までは二駅だった。あらためて切符を買う気にもならず、こちらは客待ち顔の構内タクシーに乗った。広場を出るとき、ふり返った窓越しに、バスのステップに足をかけるヨコを見た気がする。

山越えの道を通って帰宅した。家に通じる坂道をのぼる途中、背中の方から息子が飛びついてきて、ワツと声を出した。

——おどろいた、パパ？

と、野球帽の頭をのけぞらせて笑う。幼い齒が鬱陶しいほど白い。

——ママはどうしている？

ナマケモノみたいに腰にしがみついている健康な生き物の手足をほどきながら、ぼくはきいた。妹と買物に出かけた息子と、尻を叩くと、遊び仲間のほうへいっさんに駆けてもどった。小さなからだだが飛び込んだ路地から、群れた雀がいつせいにばたきうな歓声が湧く。

なるほど、ガレージに妻の車はなかった。コンクリートの壁が、がらりとむきだしだった。五分ほど歩いた坂の下にスーパーマーケットがあるが、妻はめったにそこを利用しない。地の浜でとれる新鮮な魚をあつかう店もある海ぞいの商店街まで、丘をくだつていく。門口からふり返り見はるかすと、正面、家並み越しに、鯖浜が銀の円盆みたいに輝いていた。

その頃にはめつきりたてこみ、越してきた当初ほどのひろやかな眺望はのぞめなくなっていたとはいえ、丘をひらいたその団地を、ぼくは気に入っていた。父が遺してくれた家は中腹にあったが、丘じたいが高いものではなく、風むきによつては塩の香がとどいた。裏手はずつかずの雑木林で、年中野鳥のさえずりが絶えない。桜の木が多かった。春も盛りの夜は、部屋にいても、満開の花の気配が狂おしく感じられたものだ。

袍を置くなり風呂場へ行き、熱いシャワーを浴びた。ちりちりとひりつく皮膚を冷たい水をかぶってしずめ、仕事場にひきこもる。腰をバスタオルでおおっただけのなりで寝椅子に寝そべり、小卓に並べた缶ビールに口をつけた。

うまいとは思わなかった。それでも飲まずにはいられなかった。戸外は木々の輪郭が飛ぶように感じられる光のぎらつきだ。クーラーを入れ、ブラインドをおろした室内は、まもなく対照的にほの暗く冷えてくる。水のなか、さもなくば霊安室、とぼくはしらしらと寝そべるからだにむかつてつぶやいた。

ほんとうにからだが冷えてきて、クーラーをほそめた。タオルケットで胸から下をすっぽりとくるみ、飲みつづけた。あらたな酔いに、ビールが誘い出した前夜の酔いが重なって、やがて、寝そべっていても立つのがおぼつかないと知覚できるほどに意識は蒸れ、濁ってきた。遠くから救急車のサイレンの音がとどき、みるみる迫り、左の耳裏から三十五度の角度で右の頭頂部へと抜ける。丘の裾をめぐるようにしてサイレンは遠ざかり、

——ああ、やったな。

とぼくは声に出した。黄色いワンピースが岩場に舞う光景まで、くつきりと見た。それきり、夕食もとらず、眠りに眠った。

繁男さんの電話で起こされたとき、部屋には風が通っていた。窓が開け放されていた。

飲みほした順に六コまでかぞえ、二列に並べておいたビールの空き缶は片づけられて、小卓はライオンの前足でひとなぎされたみたいになさっぱりしていた。戸外は、やはりさんさんたる夏の午後だった。

——きみと会いたがっている。見舞ってやってくれないか。

事実を簡単に告げたあとで、繁男さんはいった。くわしい状況は語ろうとはしない。また、ぼくも説明を求めなかった。容体はどうなのか、と質問すらしなかった。

——もうすこしでも、あの子のことを気づかうべきだったんです。

ぼくの応答は、むしろ年長の繁男さんをいさめるような調子だったのではないか。すくなくとも、あらかじめ事態をのみこんだ口ぶりだったはずだ。

じつさいのところは、簡単にのみこんでしまえるような事態ではなかったのだ。

ヨーコは夕方五時ちかく、骨崎の海上で、帰り船の漁師によって発見された。発見が早かったのと漁師の適切な処置のおかげで、三時間後には、収容された病院で危機を脱したが、その手首は、両方とも深く、剃刀で切られていた。かなりな量のプロバリンも飲んでた。それに、裸だった。身につけているものといえば、パンティだけだった。とりたてて潮が速い場所でも時刻でもない。服は飛び込む前に脱いだのだろうという漁師の推測どおり、黄色いワンピースとほかの下着類は、ほどなく学生証やハンドバッグとともに、岬

の鼻の岩場で見つかった。

要するにヨークは、未遂に終わったのがふしぎなくらい手のこんだやりかたで、海に入っていたのだ。その事実は、うつ伏せに浮かび、血を曳きながら波間を漂う半裸のヨークのイメージをともなつて、出来事から八年たつたいまでも、ときに生なましく甦り、ぼくを脅かさずにはいない。

しかし、こうしたことは、ずっとあとになつてから、鷹羽を通じて知つたことだ。事件をきっかけにしてぎくしゃくしはじめた繁男さんとぼくとの間を、鷹羽は共通の友人として、勤勉な通信兵さながら行き来し、つなぎとめてくれた。そんな関係から、局面によっては、ぼくよりも事情にくわしかつたのである。

——狂言ではない。しかし狂言みたいに念の入つたやりかたじゃないか。

——というのが、そのとき鷹羽がもらした感想だつた。

——ともかく会つてやりなさいよ。

ひと呼吸おいて、繁男さんはいった。怒りを噛み殺しているのがわかつた。そうと察知しながら、ぼくは態度をあらためなかつた。繁男さんの口調から、背後に奥さんの気配を感じとつて、そのほうにずっと気がむいていた。

追及されれば、じぶんの立場も芳しくなくなるはずの事態を、繁男さんは奥さんに対し

て、どのように説明したか。じぶんとヨーコとぼくとの関係を、どんな筋立てにおいて語ったか？

身に何事が起ころうと自己弁護をしないのがオトコノコというものだ、とつねづね繁男さんはいつていた。またべつに、タンパク質という言葉もよく使った。人間は、つまるところタンパク質でできているのだ、というふうに。

昭和ひとけたに生まれ、焼夷弾で焼けこげた肉親を埋葬した経験のある者としての、実感にもとづく持論だったにちがいない。しよせんタンパク質に分解されるのであれば、分解に至るまでは、せめて潔く生きるべきだ。つづめていえばそんなことになるのだだろう。しかし、それは同時に、戦争を知らないぼくとの間で、つねに、ついに噛み合うことなく終わる論争の種でもあった。

——カッコよすぎはしませんか。

繁男さんがオトコノコをもちだすたびに、ぼくはやりかえたものだ。オトコノコになりたくてもなれずにうじうじしているのが、より人間らしく感じられるともいった。

タンパク質については、人間を人間として組織しているのは言葉である、と主張して譲らなかった。

いつも同じ展開になるぼくの反論に対して、繁男さんの答えも決まっていた。

——言葉で生きているといっているうちは、まだ尻が青いのさ。さて、どこまで遊んでいられるものかね。

日頃のこんな齟齬^{そご}が、あるいは、思い返しても奇怪なあの日の応答を形づくるモチーフになつていたのかもしれない。齟齬は、たがいに酔いにまかせた放談の結果としてしまひこまれ、ふだんは表面に出ることはない。繁男さんはぼくを、空襲でなくした弟のようにみなしてかわいがつていた。ぼくもまた繁男さんを、アメリカに渡つたきり消息を絶つた、たつたひとりの兄がわりとみなし、慕つていた。とはいえ、表むき重要なこととは思われないことが、気づかないうちに静かな忿怒^{ふんぬ}となつてふりつもるといったなりゆきは、考えられないわけではないのだった。

はつきりした返事をしないまま、ぼくは受話器を置いた。東側のブラインドをあげ、窓を開ける。重たるく熟れきつた空気が、裸のからだにまつわりつく。岩場を飛ぶ黄色いワンプースを、ふたたび思った。

海がおだやかにうねっている。日は西の空にあるがなお高く、かすかに翳りをにじませながらも盛んな光で海を満たしている。遠く水平線をたどつても、空と海との境界は相互に融け合つて見分けがつかない。銀に金に紺青に変化するうねりは、多頭の大蛇のいつ果てるとも知れない交合をしのばせるようだ。宙に舞つた黄色のワンプースは、いましがた

生命を得たばかりの不思議なほど大きい蝶のようにみえる。……

背後でドアが開き、妻が入ってきた。コーヒーセットと氷水を満たしたコップをのせた円盆を支えている。それを小卓に置きながら、

——コウダという女のひとから電話がありました。ゆうべも、今朝も八時すぎに。

と妻はいった。どう記憶をたどってみても、この午後の妻の表情を思い浮かべることができない。背後から腰に腕をまわすと、

——コウダ、というひとだったわ。

と妻はくりかえした。

それがヨーコの姓だと合点するまで、ぼくはかなり手間どった。打ち明ければ、いまでもコウダが国府田なのか香田なのか、ヨーコが陽子か羊子と書くのか知らない。電話をしてきたのは姉のアイさんにちがいなかったが、これだって繁男さんの呼びかたにならっていただけのことだ。

——教え子の姉さんのようだな。

——何があつたの。

——妹のほうか海に入つたらしい。

とつさにぼくは嘘をついていた。

当時ぼくは、繁男さんの属する総合雑誌に客員の編集者として顔を出し、レギュラーで寄稿していた。その主要な仕事のかたわら、週に二回、鷹羽が教鞭をとる私立大学で、取材や記事作成のシミュレーションを中心とする実践的なマスメディアの講座をもたされしており、講座の卒業生を、つながりのある雑誌にフリーの記者として送り込むこともしていた。なにかふつごうが起ったとき、その送り込んだひとりにヨークを仕立てあげようとする魂胆は、あるいは、以前からあったのかもしれない。

ぼくの嘘は、期せずして繁男さんがついた嘘と一致していた。

前夜、まっさきに病院に駆けつけたのは、繁男さんだった。警察から通報を受けたアイさんは、都心にあつてすぐには身動きがとれない。思いあまつて、家には電話をしないというふたりの間の禁を破り、繁男さんを電話で呼び出して助けを求めた。駅でいえば極楽寺で私鉄に乗り換えて骨崎のひとつ手前、現場に近い猿樂の海辺のゆつたりと広いアパートに、繁男さんは住んでいたのである。

繁男さんは凝った鉄細工の手すりもあるベランダで、週末の宵を楽しんでいた。電話を受けたのは奥さんだった。ききなれない名前の、それも息せききった女性の声に奥さんは神経を立てたが、繁男さんは、電話の主がぼくらが行きつけのバーのママであり、その関係から、ぼくの講座を出た妹のほうも、じぶんの雑誌に出入りしていたと答えて追及をか

わしたらしいのだ。

妻はぼくの嘘に気がついたはずだった。しかし、深追いしようとはしなかった。性懲りもなくからだを密着させようとするぼくを、さりげなく、きつぱりと拒みながら、こういつただけだった。

——人間てわからないものね。死にたいと望んでも死ねないのに、死にたいとは思わないのに、あつけなくむこうのひとになったりするわ。

それがじぶんの最も奥深い場所にむかつて語りかけるような口調だったのは、その頃のぼくの暮らしの態度と関係していただろうか？ ぼくは骨崎と、その鼻の松林を思い浮かべ、そこが障害の多かった結婚前に妻とおちあい、たがいによくは知らないからだをぶつけあったこともある場所だ、と思いあたった。秋ではなかったか。岩場にも砂浜にも人影はなかった。妻は樹間を洩れてくる光に白い胸をさらし、ぼくの背にきつく腕をまわしながら、お尻がちくちくすると訴えたのだ。押し葉になった松葉をはがし、皮膚に残った逆Vの字を、ぼくは掌であたためて消そうとした。……

——見舞いに行かなくちゃならない。

ぼくはいつて、外出着に着替えた。車を出そうという妻の申し出はことわって、タクシィを呼んだ。妻を裏切っている、という痛みはやってこなかった。つかみどころのない憤